

御伽草子『玉水物語』を映像作品にする

東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻

学籍番号3223351

黒田貴子/Takako KURODA

御伽草子『玉水物語』を映像作品にする

Making Otogi Zoshi "Tamamizu Monogatari" into a video work

要旨：

御伽草子『玉水物語』を映像作品として再構築するために、私が『玉水物語』をどう理解するのか、自作の現代語訳と共に細かく考えたことを整理していく。この物語の何が面白いのか、どうすればもっとワクワクしたりドキドキするのか。制作初期段階の今の時点での考えを書いた。

1. 序論

『玉水物語』は作者不詳で室町時代から戦国時代初期の作品。狐が姫君に恋をして、そして姫君のために恋を諦める悲恋のお話である。私にとってセンター試験で出会った思い出深い作品で、ずっとアニメーション作品として制作する妄想をしていた作品だ。

私はなんとなく、現代の携帯小説なんかに通ずるところがあると考えている。『玉水物語』の工夫されている箇所は物語としての面白みに偏っていて、時代の文化はほぼ見えず源氏物語ばい舞台と書かれた当時の価値観がごちゃ混ぜになっている。仏教の教えとしても半端である。

私は現代のいわゆる携帯小説を中学生の頃から読み込んでいて、パターンや構築方法、考え方が身に染み付いている。私が読んできた大部分の携帯小説は読者、作者のストレス発散が主な目的になっている。ハラハラしすぎない展開で、主人公が完全な正義でなければならない。その目的だけを見るとなんとも身勝手だ。しかし携帯小説は大勢の人がほぼ同じ題材で物語を作る。その過程で、気に入らない部分があると次はその部分に気を遣った表現の作品が出てきたり、これが面白いとなるとそれが流行り、しばらくすると飽きてその真逆の展開が流行り出す。何度も何度もほぼ同じ内容の物語を読めるのは一つの作品を評価しているのではなくて、作品群自体が巨大で見えないコミュニケーションであってその新鮮な話し合いがとにかく楽しかったのだ。

しかし最近は面白いと感じられなくなってきたいて、もうすぐ読めなくなっていくだろう。その寂しさのためにする儀式をできるだけいいものにしようと思っている部分がある。そして私はこの携帯小説に感じた楽しさは、文化を限りなく具体的にした形なのだと考えている。そして文化はその時の社会の全てに繋がっていて、似た作品、共感する作品が遠い時代にあるということは何か私にも得るものがあるだろうし、人の目にも面白く写るだろう。

2. 『玉水物語』内容

2-1. 姫君の誕生

そう遠くないむかし、鳥羽の辺りに高柳宰相という人がいました。三十になっても子がない事を嘆き神仏に祈っていると北の方に妙な様子が、それは懐妊のしるしでした。そうして、神無月のはじめに姫君を授かりました。その姫君はどこをと

っても美しく、宝石のように光輝いて見えました。

姫君の誕生シーンから始まるのが引っかかる。この先には狐の見せ場がたんまりある、逆に姫君が思い悩んだりする様子はないに等しい。狐と姫君を同等に扱うなら狐の話から始めるべきなのだ。しかし、この話では狐は明らかに人間より下として描かれていて人間は尊いものとして描かれている。姫君だけが尊いのではない、姫君の親である高柳宰相も人に化けた狐を受け入れた養母もみんな狐の尊重すべき相手だと描かれているようなのだ。ここはこの物語の登場人物と距離を感じる要因でもあり、薄寒さのある魅力のある部分でもある。現代の携帯小説でも身分差というのは大きなテーマだ。悪役令嬢モノはまさにそうで、お嬢様で高飛車な主人公が、普通の女の子のライバルキャラに蹴落とされてからどうやって幸せになるのかとって始まる（この始まり方は無限に工夫されている）。ここでは身分の表現に凝っている作品が多い。もしかすると、世の中に不条理を感じている繊細な読者が作り物の世界の中で正当に誰かを踏み躪る権利が欲しいとかなんとか思っているからかもしれない。『玉水物語』では身分のある姫君に身分のない狐が恋をして失恋する。憧れの対象は姫君だろう、なら狐は？単純に狐の恋物語を作ってみたかったから、みたいに感じる。初めに描きたかったのは姫君の心情で、狐はおまけだったのかもしれない。『玉水物語』の作者は狐物語によくある自分が動物であることへの悩みや狐の誠実さの表現の面白さが好きで、それに対する美しいお姫様を描きたかったが、テンプレートを使って物語を描くことに長けていて、狐の方が目立ってしまった、という感じがする。案外それがうまく噛み合って不思議な魅力になっている。

2-2. 花園で出会う姫君

姫君は十四、五歳になり、花々が咲いた頃、乳母の子であり女房の月さえを連れて花園へ遊びにいきました。そこは狐が多く住む場所で、たまたまいた一匹の狐は姫君を見て一目惚れしてしまいます。

美しい姫君は、どんな女の子なんだろう。14、5歳だと現代人にとっては子供としか思えないが、成人らしい。

この一目惚れの場面で姫君は油断し顔を晒して遊んでいて、狐はびっくりしただろう。

貴族は滅多に素顔を晒さない。狐にとって裸の天女が湖で遊んでいる、みたいな状況なのかもしれない。今はインターネットでいくらでも美男美女が見られて慣れてしまっているような気がするが、慣れていたとしても綺麗な顔を見ると感心してしまう。それが初めてでしかも実物を目の当たりにしてしまった狐は夢中になってしまうだろう。

姫君の見た目を決める時、平安美人にするなら長い髪がまず思い浮かんだ。人間の美しさとは何か、それはいかに生き物らしくないかということじゃないか？丁寧に手を加えれば加えるほど人は美しく感じるようだ。それはなぜか？生活感や人間味が薄れるからである。若い動物は肌や髪がツヤツヤである、それは生活が長くないからで生活感と離れていると言える。年月を重ねた魅力と、ツヤツヤの肌が合わさると良いと思うのはやっぱり浮世離れしている、生活感がないとかの理由だろう。流行を追うのも、手間がかかるので生活に勤しむ人が簡単にできるものではない。その手間に美しさを感じているのだ。

平安美人の条件も同じである。髪が身長よりも長いなんて、生活をする上で全てに反している。人は自分以外になりたがる。なぜ自分や自然に起こることを否定することが美しさにつながるのか。人によってはコンプレックスを隠す為だったりするだろう。私個人は人の手数とそのために必要な莫大なお金、知識、生活が小さな一つに集まる様に憧れている。そう考えると美しさは何かの否定でなくても良い。自分にあるどうしようもないことが醜く感じるのなら、世界のどこかにいるそれを美しいと感じている人を探せばいいと思う。その人の感性は必ず自分を前進させるし、手軽だ。それを探せる時代に私たちはいる。私は何か一つのものが一等美しいというのは共感できない。なので『玉水物語』の姫君が特別美しいからこそ物語が進むという構成にはできないだろう。文字として描くなら簡単な表現かもしれない「一番の美しさ」は絵ではほぼ不可能だろうし、できると思ってしまうと描けなくなってしまうしうそうだ。

2-3. 狐の変化

暗くなるまで狐は呆然としていましたが、姫君が帰ったことに気づくと狐はここにもいても仕方ないと塚に帰りました。寝床で自分の姿を見てなぜ自分はこんな畜生の身なのだと嘆きます。いい男になって姫君と結ばれようかとも思いましたが、そんなことをしてもし姫君と結ばれてしまったら姫君は必ず不幸になってしまう。狐はうんうんと悩みました。姫君にもう一度会いたいと花園へ行けば石を投げられ矢を射られかけ、食べ物を食べることもしなかったもので、狐はボロボロになってしま

いました。とある家に息子ばかりで娘がおらず、女の子が欲しいと嘆く夫婦がいると聞いた狐は十四、五の美しい娘に化けてその家に向かい、家族が死んでしまって当てもなくここまで歩いてきたのです、どうか入れてもらえませんかと懇願しました。ボロボロの娘を見た夫婦はかわいそうにと快く向かい入れてくれました。

化け狐というのはよく見るけれど、なんなのだろう。この力は何の力で、どうして簡単に使えるのだろうという疑問は、この物語の中では無視されている。ここでは狐に何かしらの力があるのは当たり前で疑問にすら思わないようだ。

現代の私たちも、昔話ならまあそういうものだよなと受け入れるだろうが、不思議な力なんていう魅力的な要素なのになんでこんなにつまらないんだろう。当時は異国の文化として面白がられていたのだと思うが、その感性は現代のわたしたちにはあまりない。

不思議な力は、不思議だから面白いのに『玉水物語』の中の不思議な力は当たり前のものとして描かれすぎている。私の感覚では少し、得体の知れない虫のびっくり生体を見た時のような気持ち悪さがある。不思議なものというより、気持ちの悪いものとして描こうとした方がしっくりする。私の過去の作品に『魔法少女マサナ』という題名の恥ずかしいアニメーションがあるのだが、あの続きは少し気味の悪い怪物になる予定だった。偶然居合わせた人に大批判を喰らってやめた。変身というとキラキラして夢のような姿になるというのを小さな頃よく見ていたが、それがとても好きだ。元から可愛くてイキイキとしていたものが、物語のために変身後の姿に押し込められているとか、不思議な力で身体を歪められているように感じる。みんな自分以外になれないのに、不思議な力で変身してしまう残酷さに気づかないまま進むのが面白い。『玉水物語』でも狐が変身によって不幸になる様に惹かれる。

2-4. 玉水と姫

美しい娘に姫君は喜び「玉水の前」と名付けました。玉水はいつも優しい雰囲気ですずっと側にいて、姫君ととても仲良くなりました。

八月、養母からは帰ってきて顔を見せてほしい、実の親でもない私には親しみを持てないのかと何度も手紙が届きましたが、忙しくしていた玉水はそんな事はありませんと送ることしかできませんでした。

神奈月に、姫君の親しい人を集めて、美しい紅葉を持ち寄って競う紅葉合わせをす

ることになり、姫君に美しい紅葉の生える場所を尋ねられた玉水は、夜中にこっそり元の姿で兄弟を尋ねました。死んだと思っていた兄弟たちは喜んで、快く紅葉を探しを手伝ってくれることになりました。すぐ下の弟が、五寸ほどの枝に色鮮やかな5色に輝く葉をつけたもみじを見つけました。

紅葉合わせには美しいさまざまな紅葉の枝に心を尽くして詠んだ歌が並びましたが、どれと比べても姫君のもみじがいつも特別に美しいものでした。その話を聞いた帝は、そのもみじをご覧になり、姫君を参らせるように言いました。

紅葉合わせという言葉は性的な意味で使われているらしい。この作品を作ると言って先生方に何度も見せたが今の今まで知らなかった。

狐の健気さについて、全体に見られることだがこの紅葉を探すところで分かりやすくなっている。キツネに寄り添うために、自分自身を振り返ってみる。身に覚えはないかなと考えたが、あった。自分の家族に対しての感情である。それも自分の罪悪感だったり、優しい自分が好きだったりそんなものである。そんな私でもその行動がきっかけで理不尽な目にあって苦い気持ちになるようなドラマはあって、物語の健気な主人公に思わず涙するのはこの小さな悔しさからのカタルシスなのだろう。

私は最近、映画『容疑者Xの献身』を見て号泣した。推理については複雑だが、ドラマとしては単純である。東野圭吾の作品なら『白夜行』の方が惹かれる。そう最中も思いながらも号泣した。何故泣けるのか。堤真一の演じる石神哲哉が魅力的で、共感し、共に悩み苦しみ、暖かさを感じたからである。

私にとって魅力的なキャラクターの条件は共感でき、その中に少し懂れる要素が加わる事である。これは本当に複雑で、簡単に考えてはいけない。共感とは同じ感情を持ったことがある、だけではないのだ。人は今生きている時代を無意識に感じ取り把握している。その世界にピッタリと当てはめて違和感のない一部分、そこに共感を覚えている。もしくは時代にほぼ関係なく、老若男女関係なく言語の壁ぐらいのグループで共通の考え方がある。それを掴んだ人間が共感できる何かを作れる。そしてそれを面白くするには、現実的じゃないくらいのかっこよさをキャラクターに持たせる。文章にしたがその通りにできそうにない。『玉水物語』の狐の献身で涙を流させようと思ったら狐を繊細に動かさなければいけない。感動には「今、この場所にいる自分」が深く関わっている。これは『玉水物語』に欠落している要素である。物語の雰囲気には共感できるのに、人物描写には共感で

きない。しかし、共感できない部分が遠い時代の上品な雰囲気を出しているのかもしれない。

2-5. 養母の病

玉水に元に養母がひどい病に倒れ、玉水に会いたがっていると連絡が届きました。玉水が向かうと、養母は弱々しいけれど再会に喜んでくれました。しかし発作が起きると獣のようにのたうち回り、妖怪のような形相で苦しみました。

やっと落ち着いて家の人たちが眠りについた夜中、玉水一人で起きていると庭に全身の毛が抜け落ちた古狐がこちらを見ていました。追いかけて古狐が遠ざかると養母は楽になった様に見えました。

近くによるとそれは玉水の叔父でした。伯父が養母に取り憑いているのだと気づいた玉水はやめてほしいとお願いすると、古狐は罪のない伯父の息子を養母の父親が殺してしまったことを恨んでいて、必ず同じように娘を殺してやると言うのです。

玉水は説得しました。伯父は玉水の素晴らしい説法に心動かされ、息子の供養を頼んで一人籠って念仏を唱えて過ごすといって山に消えました。それを聞いた養母は殺された狐を可哀想に思い、供養をしてくれました。

この部分は本筋に関係ないように見えて、私の好きな部分である。まず、伯父の見た目のインパクトが強い。全身禿げた古狐なんて、今までのふんわりとした恋愛ファンタジーからのギャップがあるし、当時恐れられていた風貌が想像できる。

『玉水物語』は始めから、当時の人の言い伝えから出来上がった世界観が反映されているようで、ずっと当たり前のことをそのまま書いているというような無神経さが漂っていた。しかしこの禿げた古狐が登場した途端、初めて書き手が自分で想像したイメージを書いているという感触がある。イメージがはっきりするのだ。少なくとも私はそう感じる。しかしやっぱり汚いものは狐なのがかawaiiそうだ。

養母を呪い殺そうとする伯父を玉水が半ば無理矢理止めるのだが、伯父が可哀想に感じてしまって同胞よりも恋のために人間を優先する玉水が何か重い業を背負ってるんじゃないかと思ってしまう。流れとしても、紅葉、伯父で、結果的に自己犠牲になってしまう行

動が続くことで玉水の暗い未来を予感させる。

2-6. 姫君と狐の別れ

養母が回復し、狐は姫君の元に戻りました。霜月になり高柳宰相の屋敷では姫君の入内の準備が盛大に行われていましたが、狐は自分の想いが届かないことに悩み、自分のことを全て姫君に伝え、入内の時に別れることを決意します。これまでのことを巻物に綴り、それを魔法にかけた箱に入れました。玉水はその巻物を姫君のところへ持っていき、「もしも自分がいなくなることがあれば開けてください。でも中のかけ籠は年を重ねて世を捨てようと思った時にお開けください。」と言いました。姫君は驚いて、「なぜそうなるの、ずっと私のそばにいたと言ったではないか」と言うのですが、玉水は「いいえ、ずっとそばにいたつもりです。もしもの時のためです」と言いながら泣くので姫君はつられて泣いてしまいました。

ここの別れの涙は小学生の卒業式くらいの爽やかさがある。私の想像では冬とお祝いが重なると勝手に真っ白な雪だったり明るい晴れの光景を思い浮かべるからだろうか。ここに至るまでの玉水の様子は爽やかとは程遠く、ウジウジして悩んでばかりだったのでこのシーンが怖いくらいである。特にかけ籠の中に何があるのか気になってしまう。死を覚悟しないと開けてはいけないなんてどんな内容なんだ。

姫君の反応が可愛らしい。本当に好いている親友に対してなんとなく恋人に対するような気持ちになることはよくある事だと思う。私は長い間女子校に通っていたので、ものすごく近い気持ちで見えてしまう。対象が同性か教師しかいない場所では、自然にわかりやすい関係ができるわけではなくて、自分のアイデンティティの確立の一部として仰々しく一歩を踏み出さないと恋とは認められなかった。私は普遍的な恋の形に納得する前に、一人で自分自身の胸のざわめきについて向き合わなければならなかった。胸がときめき、引き裂かれ、楽しくてしょうがなくて、二人きりになりたくて、でもなったらなったら辛いような感情は、わかりやすい恋人や夫婦の関係には収まらないんだと思う。収まったが最後、二人は社会で生きるために人間関係を構築していかなければならない。人間関係と胸のざわめきは別物で、ざわめきは環境の変化や、長い付き合いだったりで簡単に消えてなくなるような物なのだが、その瞬間の煌めきは何にも変え難い。だから、私の想像する

ラブストーリーはいつも失恋したり恋人関係にならなかったりブロマンスのようになってしまう。でもそれはいつも納得できる幸せな話を作ろうと願ってそうになっていて、名も無い関係を賛美している。それを寂しいと思うのも、美しいことだと思う。この先この思いを否定する日が来るかもしれないが、今にしかできないことといえばこういう恥ずかしい話だと思う。

2-7.結末

いよいよ入内する時に姫君は玉水がないことに気づきます。他の人たちは、最近元気のなかった玉水を見ているので、後から来るのだろうと思って気にしていませんでした。盛大な祝いの中で姫君は嬉しそうに振る舞っていましたが内心心配で寂しくて仕方がありませんでした。玉水からもらった箱の中を見ようと何度も思いましたが、帝がずっとそばにいてなかなか一人になれず、やっと帝の用事で一人になった時に箱を開けると、中には玉水の正体やこれまでの事と「この箱には連れ添うものがあなたに飽きず、ずっと美しいままでいられる魔法がかけられています。かけ籠は姫君が老いて、この世を離れるときに開けてください。」と書かれた手紙が入っていました。

かけ籠の中が気になって仕方がない。二度も念を押すなんて、相当なものが入っているはずだ。最後まで中身は明かされない。まず、箱にかけられた魔法がなんとも言えない白々しさを感じる。そりゃあありがたい効果に違いないが、そんなに帝がいいならずと可愛がられていればいいじゃないか！なんて声が聞こえてきそう。狐は人と人の交流についても知っているはずで、老いや喧嘩が将来安泰と安心感につながることもわかっているはずなのだ。こんな魔法をかけられたら姫君は魔法で私のことが好きなんだろうと思いつづけるだろうし、帝もずっと美しい姫君に不義の不安を感じ続けるだろう。狐は陰湿な呪いをかけたのだ。これでかけ籠の中を開けると狐になってしまうなんて恐ろしいことが起こらなければいいけれど、一目惚れした姫君をまだ見ぬ不幸に晒す勇気すらもてず男になるのを諦めたくせに近くにいることは諦められなかった結果、辛い結末を呼んだ狐は後悔と恨みでいっぱいになっているだろう。そんな時人に優しくできるだろうか。

3. 結論

私は自分のような人のために作品を作りたい。自分以外の人は理解できないから、わからない人に何かを伝えるなんて傲慢なことはできないし、自分が一番好きな作品が自分の作品なるなんてことになったら、きっと一生で一番嬉しい出来事になるだろう。2024年に生きる23歳の私はこの遠い昔の『玉水物語』をどう楽しむのか。きっと、私のようにこの作品に親しみを感じる人がいるはずである。いつときの結論なんて制作中は何にも役に立たない、とにかく真剣にわからない中を進むしかない。

文献

- ・著者不詳. 夕陽亭馬齢編. (2019). 玉水物語：お姫様に恋した狐. 夕陽亭文庫.
- ・西谷 弘. (2008). 容疑者Xの献身.